山名

源矩豊

第8号

会誌「山名」第8号　目次

山名氏と沢庵和尚　山名　美和子　1
我がファミリーヒストリー　桃井　良直　9
拙著『日本史の変動と名言摘録』を脱稿して思うこと　山名　年浩　16
日帰りで出石への旅へ　飯田　麻紀子　20
山名伊豆守義範公について　宮田　靖国　23
西陣、東陣の発展をめざして　山名　靖英　40
西陣、そして東陣　細尾　真生　48
豊国の国入りと打揚駕籠を許された山名家　古川　哲男　55
健康寿命について　会員何某　57
義理流―田渕氏の系譜　吉川　廣隆　61
豊臣期の山名禅高（豊国）　石井　伸宏　67

サンプル

＝特別寄稿＝

山名氏と沢庵和尚

山形紀行　沢庵和尚の旧居跡「春雨庵」を尋ねて

作家　山名美和子（山名会会員）

山形盆地に若葉の匂うころであった。山形城址、最上義光歴史館、県郷土館「文翔館」、駒姫の菩提を弔う専称寺などをめぐって取材を終え、上山市を指してレンタカーのハンドルを握り、羽州街道（国道１３号）を南下する。

駒姫の哀れ

ついでながら専称寺にまつわる駒姫の悲劇を記しておこう。山形城主・最上義光の末娘である。戦国末期の１５９１年（天正１９）、関白・豊臣秀次が九戸政実の乱を平定するため陸奥へ下向。その帰りに山形城に立ち寄った。接待にあたったのが駒姫である。秀次は１２歳の可憐な姫に心ひかれ、側室に出すよう義光に約束させた。３年後、駒姫は京へ向かう。ところが翌年、秀次は叔父・豊臣秀吉から謀反を疑われて切腹。秀次の正室や側室、その子どもたち、あわせて３８人は京の市中を引き回され、三条河原で斬首された。わずか１６歳の駒姫も義光の助命嘆願むなしく打ち首になった。まだ秀次にお目見えさえしていなかったという。姫に同行し上京していた母も没したと伝えられる。江戸時代になり、義光は旧領山形の藩主として５７万石の大名に取り立てられた。娘を非業の死に追いやった悲しみはいかばかりであったろう。専称寺の壮大さは義光の痛みの深さに思えて、しばし合掌せずにはいられなかった。

山形から上山へ

さて、本題に戻ろう。車は山形市内から30分ほどで上山市中心部に入る。「かみのやま温泉駅」は山形駅から新幹線で9分、在来線でも12分、約12kmの距離でしかない。名湯で人気の上山温泉は15世紀半ば、旅の僧が発見したと伝えられている。

かみのやま温泉駅から歩いて7分ほど、標高198m、比高差20mの低丘陵上に上山城（別名月岡城）の天守がそびえる。1535年（天文4）、戦国武将の武衛氏が月岡・天神森とよばれるこの地に城を築いた。江戸初期、上山藩主となった土岐氏が整備拡張、壮麗な城郭は「羽州の名城」として知れわたる。

土岐氏が他国へ国替えになったあと、城主はめまぐるしく変わり城は衰退。明治の廃城令で取り壊しとなる。1982年（昭和57）、コンクリート造りの3層4階、高さ31．7mの天守が再建された。内部は郷土資料館となっており、最上階からは市内や雄大な蔵王連峰が一望できる。

静かにたたずむ「春雨庵」

郷土資料館で大名の参勤交代や出羽三山巡りの旅人でにぎわう近世の上山宿の様子、蔵王の自然と蔵王修験の世界などの展示をたどる筆者の眼に、「澤庵宗彭」の文字が飛び込んだ。あの「沢庵漬け」を考案したという沢庵和尚である。そうだった、和尚は紫衣事件で流罪になったはず。その住まい「春雨庵」が、まさにこの城下に築かれているのだ。これは尋ねなければならない。天守を下り、まずは城址の月岡公園で足湯をつかい、散策の英気を養う。城下には藩政期そのままの茅葺きの武家屋敷が何棟か現存する。中級武士の住まいだったというが、屋内から

春雨庵の鄙びた表門（筆者撮影）

は子どものはしゃぐ声なども聞こえて、今も居住者がいるようだ。沢庵和尚の旧居跡「春雨庵」はすぐだった。「春雨庵」の扁額が掲げられた桧皮葺門、土塀、竹垣、手入れされた庭木、さりげなく繁る野の花、その奥の小さな庵は、俗世と隔たる清らかさでたたずむ。

１６２９年（寛永６）、幕府の命令で上山へ配流された和尚を、城主・土岐頼行は庵を寄進して手厚く庇護。和尚はこの庵を気に入って「春雨庵」と名付けた。現在の春雨庵は、１９５３年（昭和２８）県史跡に指定された庵の遺構に、１９５５年（昭和３０）原型通りに復元されたものである。

春雨庵と沢庵愛用の井戸（筆者撮影）

室内のひんやりとした畳敷きに、明障子を透かして木漏れ日が淡く忍び込む。座敷奥の壇上には、胸まで伸びる顎髭をたくわえた法衣の沢庵和尚の尊像が鎮座する。静かに向き合えば、穏やかな法話が耳をかすめて聞こえてきそうだ。庵のかたわらには和尚が日々愛用した井戸「山の井の水」が残っている。

沢庵和尚の生い立ち

沢庵和尚は１５７３年（天正元）、秋庭能登守綱典の二男として但馬国出石（豊岡市出石町）に生まれた。父・綱典は、但馬国守護・出石城主の山名祐豊の重臣であった。祐豊は持豊（宗全）の５代あとの山名氏総領家である。１５４２年（天文１１）に生野（兵庫県朝来市）で生野銀山が発見され祐豊は銀山経営を大規模に推進、日本有数の銀山となっていく。その管轄権をわが物にしようとする織田信長は但馬に侵攻、配下の豊臣秀吉に攻められて山名家は滅亡し、秋庭綱典は浪人と

我がファミリーヒストリー

桃井良直（桃井家当主）

貴兄（山名年浩様）のホームページを拝見し、初めてお電話を差し上げたのが、7年前の2015年7月8日でした。本日、2度目のお電話をさせて頂きましたのは、山名様の親戚の桃井静子（私の父方の祖母）の夫・桃井直幹（陸軍軍医中将）に関する貴重な資料（写真）を発見したからです。

祖父・桃井直幹（陸軍軍医中将）とラストエンペラー溥儀との2ショット写真（非公開）。昭和15年に溥儀が2回目の来日をした際に、陸軍軍医学校での極秘写真です。祖父はこの時、陸軍軍医少将兼陸軍軍医学校校長で、この直後に、陸軍軍医中将（軍医のトップ）に昇進し、終戦直後には、勲一等瑞宝章を授与されました。

現在、世界中がコロナ感染で騒然としておりますが、我が国の国立感染症研究所の前身（戦前・戦中）は、陸軍軍医学校であり、そのトップは祖父でした。戦いで亡くなる兵士よりも、マラリア等で亡くなる兵士の方が遥かに多かった時代に、祖父はその感染症と最前線で戦っておりました。御前会議に出席した祖父を誇りに思います。

祖父は、中国戦線においては、昭和天皇の弟君の三笠宮殿下の主治医でもあり、父・桃井直達は、殿下の御推薦で、筑摩書房から著書「ホメロスなくしてトロヤなし」を出版させて頂きました。シュリーマンがトロイの遺跡を発掘する壮大なる

祖父・桃井直幹と溥儀（右）
（桃井良直所蔵）

歴史ロマンの物語（実話）ですが、古代オリエント文明の研究者として著名であられる殿下のお力があってこそ、初めて、この書籍は世に出ることが出来ました。

ラストエンペラー溥儀と祖父との2ショット写真は、防衛省の方でも誰も見た事もない秘蔵写真ですので、私が著書を出版する際には、この写真を先ず巻頭に登場させ、「最愛の祖父母・桃井直幹静子に捧ぐ」と明記し、桃井家に関するファミリー・ヒストリーを紹介するつもりでおります。

また、面白いエピソードとして、幼き頃、祖父から聞いた話を御紹介します。中華民国・南京政府のトップ・汪兆銘が、演説中に暴漢から狙撃され3発の銃弾を受けたのですが、名古屋大学病院にて、その銃弾の摘出手術を指揮したのは祖父です。

小説家の上坂冬子さんが著書「我は苦難の道を行く～汪兆銘の真実」（文春文庫）の中で、「その銃弾を摘出したのは、内科医の軍医・桃井直幹氏ではないのでは？」と書かれていたのは誤りです。

祖父は、部下の外科医を指揮し、見事にその銃弾を摘出し、汪兆銘夫人から非常に感謝されました。南京政府が海外のＶＩＰに与える一級同光勲章は、勲一等とともに、桃井家筆頭の跡取りの私が、現在、大切に保管しております。ただ残念なのは、幼き日に祖父から見せてもらった汪兆銘のレントゲン写真とロングピースの缶に入った3発の銃弾が行方不明になってしまったことです。

祖父はまだ小学生の私に「人生は長い、浮き沈みも激しいので、失敗しても、気にすることないからね、良直君！　やり直しは何度でもきくから」と、印象深い言葉を残しました。

最近、その意味が良くわかりました。祖父の郷里の和歌山市から取り寄せた軍歴証明書に、気になった記録があり、長年私は不思議に思っておりました。勲一等をもらった祖父が、何と2階級も降格していたのです。そこで、慶応義塾大学の後輩でもある歴史家の磯田道史先生（ＮＨＫ「英雄たちの選択」の司会者。映画「武士の家計簿」原作者。ＮＨＫ大河ドラマの時代考証でも有名）に相談し、調査を依頼しました。

拙著『日本史の変動と名言摘録』を脱稿して思うこと

山名年浩（山名会相談役）

歴史研究の面白さとは新たな史実が明らかになった時にある。歴史のダイナミックな変化を背景にした人間の行動はその言葉としても後世に残されてくる。時代背景の中での人々の心の動きはその人物をみる上で大切である。過去の歴史的な文献を見ると、ほとんどは時代背景と人物の言葉が別々に取り上げられてきた。両者の関係を取り上げた研究は少なかった。本書の特徴はこの視点で日本の歴史を取り上げたことにある。特に、歴史変化の根底にある経済の変化から土地所有者層の変化を時代背景として取り上げた。名言はその人物の平穏・前進・飛躍の局面や後退・敗北や破滅の局面と様々に出てくるが、それなりに大切な言葉ととらえた。

筆者は経済学の著書を単著で１０冊、共同または分担執筆で６冊、翻訳書６冊、論文９６編(内レフェリー制の論集へは３０編)等を作成してきた。今回はライフ・ワークとして、歴史の著述を世に出すことにした。

一族の顕彰会が発行する冊子の目的はおのずと、その一族の過去からの歩みを称えることが主題となって当然であろう。ところが、歴史を含む研究の作業は当初から打ち立てた目的に収斂するような意図ある作業は客観性に欠けることになり、研究とはなじみにくい。

本書『日本史の変動と名言摘録』は単に名言を羅列したものではなく、名言を生み出した社会状況を考察し、その時代背景との関連で歴史上の人物の言葉を取り上げている。このことについては、Ｐ４００～４０１に図を使って説明しておいた。

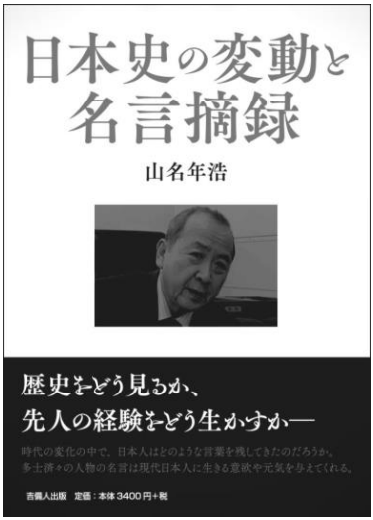
また、人物を取り上げることを中心に、日本史の注目すべき13点をP3～4にまとめておいた。戦後の歴史学は戦前期の反省もあり、人物で歴史を綴ることにアレルギーがあるようであるが、本書は独自の展開を目指した。

一般に文系学問の妙は、先人の研究遺産の精緻な解釈が必要になってくる。本書は限られたページ数の中でこれをなしたつもりである。また、図版などの引用については今日の日本では引用先に断りなく掲載することは　引用許可を十分にとっておかなければトラブルが発生してしまう。こうした、下作業の上に、オリジナリティが発揮されなければ、研究とは言えない。だから、研究者の論文などの著作物は根拠の薄弱な興味本位の物は排除されるのが当然である。したがって、軽いものはあり得ない。この点では、NHKの大河ドラマも目的が視聴率を上げることに力点が置かれると、史実に反する誇張が目立つことになるので、歴史学者はさほど好んではいないようである。つまり、研究とはどの分野であれ、地味な時間のかかる作業である。

日本史の変動は経済的な変動、特に土地所有をめぐる権力基盤の形成と葛藤が続く中での言葉はすごみのあるものも多く、調査し執筆していて心を打つものが多く楽しかった。本書の作成には、構想してきたものを退職後の四年半の歳月で書き上げた。

もともと経済学研究を続けてきたが、歴史研究の際立った特徴は時代区分への関心が強いことであった。

歴史学は戦前期は皇国史観で貫かれ、戦後は唯物史観が跋扈する時期があった。これら二つの史観は研究の前に結論が決まっており、それに収斂



『日本史の変動と名言摘録』
山名年浩相談役著
吉備人出版・A5判442P
ISBN 978-4-86069-696-2

させるように展開するという点で共通しているが、こうした作法は研究とも学問とも言えない。現在は歴史的な事実は何かの実証が重視されている。そして、戦前はもちろん戦後の歴史研究の中で、公認の事実とは認められない記述は(特に、学校教科書では)削除され、実証的な研究成果が記載されている。歴史には発見からわかる、ロマンがある。作り話が入らない面白さが歴史のおもしろさであろう。各地で講演をしていると、教育勅語の復活を言う聴衆がおられるが、戦前の憲法の基においてこその教育勅語であり、現憲法には整合しえない。他方、百姓一揆など民衆の抵抗や反乱で歴史が動いたと断定する史観も不自然である。これら両極の偏りを排して、史実に基づいた歴史研究が求められている。

今日、全国各地の地方史の研究会が盛んなのは、そうした丹念な研究成果の広がりに表れている。最後に本書を取り上げた、歴史研究会の書評(『歴史研究』2023年4月号　第709号)を掲載させていただく。この歴史研究会は歴史学者と在野の研究者が共存しているところにある。

『歴史研究』709号の紹介文より

(以下の記事は『歴史研究』誌での本書の紹介文)

歴史を学ぶ意義とはなんであろうか。歴史好きの人であれば、誰もが一度は考えたことのある問いであろう。本書によると、過去の人物の生き方は、現代の人間の生きる糧になるという。

とくに、過去の人物が遺した言葉は、その人物の生き方を端的に表している。

本書は、このような魅力にあふれた日本人の名

『歴史研究』709号より
戎光祥出版

言をまとめたものである。本書と世にあふれている名言集との違いは、「時代背景」をはじめとする日本の偉人が偉人たりえた前提を記述している点であろう。

多くの名言集が言葉を単発で紹介し、発言者個人の性格が注目されがちなのに比べて、本書は名言を日本社会のなかに位置づけているのである。

さらに、本書は世界のなかでの日本という国の独自性へ話が展開している。そのうえで、グローバル化の進む現代において、日本が直面している課題について提言している。

山名会歴史討論会で進行をつとめる筆者（左）
（平成27年　京都池坊短大心ホールにて）

日帰りで出石への旅

～豊岡で歴史を再確認～

飯田麻紀子（山名会会員）

令和五年に入り、季節は春へと移り変わりつつある三月三日ひな祭りの日、特急コウノトリに乗り弾丸日帰りで出石への旅に出る。コロナも落ち着いて穏やかになり、電車内は賑やかな雰囲気で車窓から見る景色は優しい緑の風景が続く。豊岡駅へ着き、出石行きへのバスへと駅付近のロータリーへ。出石の中心地である辰鼓楼（しんころう）辺りへ行く前に、出石神社へ参拝しようと思い立つ。少し手前の「鳥居」バス停で下車、出石神社の方向へ歩くこと数分。立派な鳥居とともに数年ぶりの風景が蘇ってくる。自然とここに来たいという感覚と、無事に到着できた安堵感・・・感慨深い想いで参拝する。そよ風にたなびく境内にはベンチがあって、しばらく禁足地のほうを眺めていた。人の立ち入りは禁止されているということは、歴史的に見ても重要な地と考えられる。大切に、後世にも守り続けられることを祈ってやまない。

その後、境内を後にすると此隅山（このすみやま）城跡の看板を見つける。神社からほんの数分のところ、文字通り目と鼻の先の場所で一五〇〇年代前半、戦さが繰り広げられ、出石神社も戦乱の影響を受けている。(1)

現在はその面影はなく静かできれいな緑が、清々しい気持ちにさせてくれる。此隅山城跡内の地名が、これから近くまで行く有子山（ありこやま）城跡の地

出石神社の背後に位置する「此隅山城」。

山名伊豆守義範公について

『山名赤松研究ノート』第6号（平成七年（1995）刊行）から転載

宮田靖國（山名会相談役）

つらつら山名氏時運の没革を考えるに、その誹謗（特に今川了俊著『難太平記』の冒頭内容）に対して、胸中に慷慨の念、欝勃として起るによりて、ここに一端を吐露したい。

私が一番言いたい事は、山名氏太祖である義範公が鎌倉幕府草創期に於て、平家追討の褒賞である源氏受領六人の内一人、というより筆頭に挙げられているという事実である。即ち、「吾妻鏡」に曰く、

〔文治元年（一一八五）八月〕

「廿九日己卯、去十六日有二小除目一、其聞書今日到来、源氏多以承二朝恩一、所謂義範（山名）伊豆守、惟義（大内）相模守、義兼（足利）上総介、遠光（加賀美）信濃守、義資（安田）越後守、義経（義経）伊予守等也、義経朝臣官職事、於二以前一者、二品頻雖レ被二傾申一、至二今度予州事一者、去四月之比、内々被レ付二泰経朝臣一畢、而彼不義等雖レ令二露顕一、今更不レ能レ被二申止一之、偏被任二勅定一云々、其外五ヶ国事者、任人面々直懇望申之間、且募二勲功之賞一、且為レ添二二品目一、殊所レ及二厳密御沙汰一也云々、各可レ令レ知二行国務一之由云々、皆是当時関東御分国也、云々」

と。

ただ、九条兼実の日記である「玉葉」には義経以外の氏名を省略している。

「八月十六日丙寅、天晴、今夜有除目、依頼朝申也、受領六ケ国、皆源氏也、道路以目、不能左右々々、此中、義経任伊予守、兼帯大夫尉条、未曽有々々々」

しかし、右大臣中山忠親の日記である「山槐記」には、やはり伊豆守、即ち山名義範公が序列の首座である。曰く、

「八月十六日、丙寅、陰晴不定、地動一座、有小除目、源氏任伊豆・相模・上総・信濃・越後・伊予等守云々」

つまり、山名義範は源氏宗家は別として、一族一門の長老として考えられていたのである。それは当然の事である。なんとなれば、山名義範は新田義重公の長男だからである。後年、北条政子が新田義重の死去に対し、何と言ったか。「吾妻鏡」は次のように伝えている。曰く、〔建仁二年（一二〇二）二月〕

「廿九日乙亥、中原親能掃部入道が亀谷の宅において御鞠あるべきの由、兼ねて定めらるるの間、殊に結構せらる。金吾頼家出御あらんと欲するのところ、尼御台所政子、二階堂行光をもって申されて云はく、故仁田入道上西は源氏の遺老、武家の要須なり。しかるに去ぬる十四日卒去し、いまだ廿日に及ばざるに御興遊、定めて人の謗を胎さんか。然るべからずと云々。

金吾、蹴鞠においては機嫌を論ぜざるの由申さしめたまふと雖も、つひにもって抑留せしめたまふと云々」

これを読んでも、いかに新田義重公の存在が鎌倉幕府に於て大きかったかが分かる。

ただし、山名義範公が源氏受領六人の内の随一に挙げられたのは、新田義重の嫡男という理由もさる事ながら、直接の所以は戦場での高名手柄であろう。一の谷合戦について「吾妻鏡」（以後の「吾妻鏡」は全て、高崎市刊の「高崎市史資料編4」からの引用文）に曰く、〔元暦元年（一一八四）二月〕

「五日甲子、西剋、源氏両将到二摂津国一、以二七日卯剋一、定二箭合之期一、大手大将軍蒲（源）冠者範頼也、相従之輩、

（中略）

巳下五万六千余騎也、搦手大将軍源九郎義経也、相従之輩、

遠江守義定　大内右衛門尉惟義　山名三郎義範
斎院次官親能　田代冠者信綱　大河戸太郎広行
土肥次郎実平　三浦十郎義連　糟屋藤太有季
平山武者所季重　平佐古太郎為重　熊谷次郎直実
同小次郎直家　小河小次郎祐義　山田太郎重澄
原三郎清益　猪俣平六則綱

（下略）」

ところで、新田本家は余り鎌倉幕府に於て重きをなさなかったのではないか、と言う人もあろう。その理由は代々の北条得宗が、新田氏の力を削いでいったからであろうが、頼朝挙兵の時に義重が源義家嫡孫の故を以て、頼朝の下知に従わなかったから、

西陣、東陣の発展をめざして

山名靖英（山名会理事長）

西陣は、京都市上京区に位置している。「西陣」は「西の陣」の意。

かつての「応仁の乱」において、山名宗全公がここに陣を構えたのでこの名前が付いた。いまも「山名町」という町内が存在している。

山名町内には、「山名宗全公館跡」があり、毎年町内の方々が清掃活動をされ守っていただいていることに感謝で一杯である。（写真A）

そして、「私たちの町に山名宗全公の館があったことに誇りを持っています。」と語られている。

(写真A)宗全邸跡の石碑

（上京区山名町）

「西陣」は日本人なら知らない人はいない有名な地域である。

特に、「西陣織」は、1200年の歴史を刻む京都の伝統産業として全国に名を轟かせ栄えてきた。一昔前には、狭い路地奥に入ると、「バシャンバシャン」という機織りの音が方々から聞こえていたものだ。

1467年、「応仁の乱」が勃発すると、織物職人は全国に避難したが、10年後には再び京都に戻り、織物の町が復活したという。この頃から「西陣」と呼ばれるようになったそうだ。

現在は，約300の織物業者がおられ、約2万人の方が機織りに従事され、年間300億円の出荷額で、日本を代表する織物の町である。（西陣

織工業組合資料より）

一方、「応仁の乱」での山名側の陣（「西陣」）に対し、細川勝元陣営は、東の陣（「東陣」）を築き、堀川通りを挟んで兵を集め対峙した。その数山名側9万に対し、細川陣営は16万と伝えられている。かなり誇張されている感がする。堀川通りを挟んで、これだけの兵が対峙したとは考えられない。

ともかく、乱は10年近く続き、京都の上半分は焼け野原になったことは事実である。応仁記には「汝やしる　都は野辺の夕雲雀（ひばり）　上がるを見ても　落つる涙は」と書かれている。

京都上京の人は「先の闘い」といえば、第二次大戦ではなく、「応仁の乱」のことをいうそうである。

戦いが終焉して、西陣は織工が帰ってきて、西陣は元の活気を取り戻す。しかし、細川が陣を張った「東陣」は、特段の賑わいもなく、今日に至っているのだ。

そこで、西陣だけに焦点があてられるのではなく、東陣の存在も広く知ってもらい上京区の振興にと発足したのが「東陣プロジェクト」である。

その発足に際し、京都市上京区地域力推進室が音頭を取って、山名、細川両家の代表が相まみえてシンポジュームが開催された。（2017年6月）

細川家からは、永青文庫理事吉丸良治氏が参加。山名側からは、私山名靖英が出席した。定員300名のところ、400名に近い市民が参加をされるほどの大盛況でした。（写真B）

以下、シンポジュームの様子をご報告いたします。（上京区ホームページより一部加筆し転載します）

町衆成立今に伝わる文化も
西軍代表
東軍代表
東軍・吉丸さん「細川家は美術品を大事に」
西軍・山名さん「宗全は不正を許さない人」

(写真B)シンポジウムの記事

西陣、そして東陣

―東陣プロジェクトの活動―

応仁の乱東陣プロジェクト実行委員会　会長　細尾真生

私は西陣で生まれ西陣で育ち西陣で今も住んでいます。そのうえ仕事も西陣織を生業にしており、先祖は３００年以上前から西陣織を織っていました。「西陣」は私のアイデンティティーそのものです。そして応仁の乱以降私の住んでいる地域が西陣と呼ばれるようになったことは、学校でも学びました。

「応仁の乱」は応仁元年（１４６７年）に発生し、文明９年（１４７７年）までの約１１年におよんで継続した内乱。細川勝元と山名宗全の二大有力守護大名の対立を生み、幕府を細川勝元の東陣営、山名宗全の西陣営に分ける大乱となった。

ならば、山名宗全の西陣と細川勝元の東陣があったはず。なぜ西陣が有名になって、東陣は知られていないのか？東陣を調べ、東陣の魅力を引き出し、西陣あっての東陣、東陣あっての西陣という関係性をつくれば、西陣と東陣を擁する、我々の行政区である上京区の魅力、そして延いては京都の魅力がもっともっと高まり、地域の更なる活性化に繋がるのでは。人のやらないことをやるのが好きな自分の性格と無名な東陣を西陣より有名にしてやろうという天邪鬼的な思いが深まり、この東陣プロジェクトに没頭していきました。この私の思いに、地元の歴史研究家や愛好家の方々、上京区長を始めとする行政の方々、京都市考古資料館の方々が共感し、応仁の乱東陣プロジェクト実行委員会が２０１５年に誕生したのです。

まずは、堀川、小川（こかわ）から東に陣を張った東陣の

地域の調査、研究からスタートし、一般の方々が分かりやすく親しみやすい散策マップを作成し、２０１５年１１月に京・上京探訪まち歩きツアー「東陣」を多くの参加者と共に実行しました。そしていよいよ翌年２月に新春特別歴史シンポジウム「応仁の乱―今輝け東陣を訪ねて―」を開催することになりました。場所は上京区総合庁舎４階大会議室。午後１時３０分開始。定員１８０名先着順、申込不要。参加費無料。基調講演「応仁の乱と上京の史跡と遺跡」講師山本雅和氏（京都市考古資料館副館長）。パネルディスカッション、コーディネータ山本雅和氏、パネラー中谷香氏（上京区長）古武博司氏（国際文化政策研究教育学会員）豊田博一氏（上京探訪シナリオ研究会会長）。どれだけの人が集まるのだろう？非常にマニアックなシンポジウムですので１００名集まれば良しとしなくては、と高を

「今輝け東陣を訪ねて」の案内パンフレット

くくっていました。

準備の為に関係者は正午に集合、ということで正午に会場に行ってみると、１時間３０分前だというのに２０～３０人の聴衆がすでに来られていました。それから次々と聴衆が増え、１時間前にはほぼ満席。急遽あわてて関係者全員で椅子の数を２５０名まで増やしましたが焼け石に水。すぐに満席になり、会場に入られない人が、エレベーター前にあふれ、総合庁舎の一階ロビーにあふれ、総合庁舎の前の今出川通に長蛇の列ができるという事態になってしまいました。会場と総合庁舎が正に応仁の乱の状態でした。上京区役所の所員の方々にご来場いただいた方々に謝罪してもらい、会場に入れない多くの人にお引き取りいただき、大変なご迷惑をおかけするシンポジウムになりました。この様な事態になるとは予測しておりませんでしたが、「応仁の乱」に対する多くの方々の関心の深さ、東陣という聞いたこともないテーマに対する好奇心の強さを改めて体感させていただきました。

豊国の国入りと打揚駕籠を許された山名家

郷土史家　古川哲男

国入りをしていた豊国公

村岡山名家初代豊国（出家後禅高）と二代豊政は国入りしていないと伝えられていましたが、豊国が国入りしていた記録が見つかりました。

記録が残されていた家は、香美町小代区の旧家田渕家で、先祖は但馬守護出石山名家の家臣で、丸に三ッ引き紋を賜り、鶴ケ峯城の垣屋家に仕えたり、大坂城攻めに加わった人もおり、豊国が七美郡を賜った時小代庄の代官を仰せ付けられたと「先祖伝書之覚」に書かれている。

陣屋が七美郡福岡に置かれていた当時、豊国が国入りをして能楽（のうがく）を催し、田渕嘉右衛門も招かれて十二面の能面を賜ったが、三代矩豊が村岡に陣屋を移して国入りをした寛永二〇年（一六四三）に、豊国から賜った能面の内七面を田渕嘉兵衛が矩豊に差し上げた、と記録されいるが現在田渕家に残されている能面は一面だけである。

なお、山名家の家紋は現在丸にニッ引きであるが、山名の一族同志が戦った明徳の乱

豊国から拝領した能面

（明徳二年・一三九一）までは丸に三ッ引きであったが、戦乱後三ッ引きは散々に通ずるとしてニッ引きに改めた。

また、五七の桐紋も家紋であったが、明徳の乱は山名一族が争って、敵味方共同じ家紋の旗印で紛らわしいので、但馬守護の師義側は、五七の桐紋の蝉本（旗竿の上部）に笹の葉を結び付けて戦い、その後五七の桐に七葉笹に改めた。

打揚駕籠を許された山名家

康永五年（一七七六）二月幕府は、乗物のうち打揚腰網代・打揚・打揚か腰網代のいずれか、腰網代を許された大名など三四人にこれを許し、他はこれの使用を禁止した。

打揚とは、引戸の代わりに簾が垂れ下がった乗物で、引戸より格が上とされていた。

腰網代とは、乗物の下の部分が桧の薄板を編んで貼ったもので、ちなみに、将軍家と紀州家は溜塗惣網代であずき色の乗物、尾張・水戸家は打揚腰網代あった。

これが許された家々は、徳川家と近世姻戚関係が有った前田・池田など有力大名か、戦国時代以来の由緒ある島津・伊達・細川・毛利・佐村・上杉などと、ご三家その分家の嫡嗣や弟も許されている。

他に、旗本で許された家は二家だけで、喜連川家と山名家だけであった。

喜連川家は室町時代の関東公方足利の系譜を持っているし、山名家は室町時代の名門である。

喜連川家と山名家の交流もあり、村岡山名家六代豊就の正室は三池立花家家生まれであるが、喜連川家の養女になり、豊就に嫁いでいる。

なお、但馬・丹波・丹後の大名や旗本で、打揚駕籠が許されたのは、山名家だけであった。

義理流―田渕氏の系譜

吉川廣隆（山名会事務局）

訪問者

数年前の6月の事、山名蔵に先祖の発祥たずねて隣町の方がお見えになった。

その方曰く、「山名某の側室の子が先祖だと伝え聞いている。詳しいことを知りたくてお邪魔した。」と仰る。お名前を聞くと「田渕」と言われる。

田渕姓はこの辺りでは良く聞く名字で、法雲寺の檀家の中にも2～3件田渕姓がある。私の高校の同学年には少なくとも10人以上の「田渕君・田渕さん」が居たように思える。それ程この辺りでは普通以上の良く聞く名字である。

その田渕の祖が「山名某の側室の子」と言うのは初耳で、俄には合点がいかない。その方は、「今日は下見で、後日改めて同族4～5人で出直す」と言われ、その日は短時間で帰られた。

今まで山名に関連した姓に田渕姓も含まれるという話は聞いたことが無く、老僧に聞いて見ても同じく。そもそも、その方が言うように「側室の子」で有ったとしても、せっかく出来た跡継ぎの姓を山名から他の姓に変える理由が分からない。それにいったい「山名某」とは誰なのか、時代は江戸時代のことか、それ以前のことか、疑問が残る。

思い違いでは？

ひょっとして何か他氏と勘違いされているのでは？例えば、表米王を祖とする但馬の日下部氏の末裔が枝分かれして太田垣・八木・朝倉・田公等

へと分かれて行った。その流れの中で、田渕姓も形作られ、それを山名氏発祥と勘違いされているのかも？と思いつつ、次回その方達がお越しになった際に参考になることは無いかと『七美郡誌』を開いてみた。

『七美郡誌』は、江戸後期から明治時代にかけて旧村岡藩内で医師をしていた八木玄蕃が著した書物で、明治時代に入り急速な時代の変化によって、姿を消していく明治以前の記憶を留めようとして、藩内にあった各種組織や遺構や社寺、重要な出来事、各集落の成り立ちや、地域に伝わる言い伝え、加えて主要な氏の経歴や、関係名簿までも網羅した記録で、昔のことを調べようと思うと、私の場合、先ずこの本を最初に開く。

訪ねてこられた方は、当地村岡から10キロほど離れた養父市関宮町（旧・七美郡熊次郷）丹戸の田渕さんであったので、丹戸村の頁を開き田渕姓に関連する事項が無いか見てみると、下記のようなことが記してあった。

羽柴軍の但馬因幡侵攻の頃の話、但馬山名の家臣で、当地方を治めていた田公氏が因幡に頓出した後に、田公残党が藤堂高虎を相手にし「小代一揆」を起こす。その一揆の首謀者を太田垣信喬と田渕清理という。この一党はしばしば小代郷から丹戸周辺まで出陣しては結構暴れ回り、特に田渕清理は鉢伏高原で弓矢を引いて矢の落ちたところまでを自分の領地とするなど言って威勢を張ったが、羽柴軍の但馬平定以降は本拠地である小代郷新屋へと大人しく帰って行った。

という記述がある。

この中に登場する「太田垣信喬」とは、竹田城主の太田垣土佐守輝信（延）の次男で、竹田城落城前後、小代郷城山城主の田公を頼って小代郷に移っている。（確かに小代には太田垣姓が今も残っている）

その太田垣と共に一揆の首謀者に名を連ねる田渕清理も太田垣に並ぶ求心力を備えた人物と見えるが、田渕氏についての詳しい記述は見えない。

豊臣期の山名禅高（豊国）

鳥取市歴史博物館　石井伸宏（学芸員）

はじめに

山名氏は上野国山名郷を本領としていたが、南北朝期に山陰地方を中心に西国に領土を広げた。その後、紆余曲折を経て但馬、因幡、伯耆の三ヶ国の守護職を本領的な所領として獲得し、また幕府の中枢においても侍所所司（長官）や宿老として重きをなした。

山名氏が西軍の大将となり戦乱の中心となった応仁の乱後、山名氏は将軍に参仕しつつも、領国では次第に勢力を落としていった。そして戦国時代には中国地方で勢力を広げる尼子氏や毛利氏、近畿地方で急速に勢力を拡大する織田氏の間にあって、山名氏の領国であった伯耆、因幡、但馬は周辺の強大な勢力間の境目となっていた。

その様な状況下で、山名禅高（1）は山名氏が周辺の勢力に圧されつつある斜陽期に、但馬山名家から因幡に守護として送り込まれた豊定の子として天文十七年（一五四八）に生まれた。

禅高の生涯については小坂博之が詳細に論じている（2）。小坂は禅高の生涯を前半と後半で大きく分けている。小坂によると羽柴秀吉による天正八・九年（一五八〇・八一）の鳥取城攻めを契機に領国を失うまでを「最後の守護」としての前半生とする。そして織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らによって天下統一が進む中で、天下人に近侍して過ごし、最終的に村岡に所領を得て生涯を閉じるまでを「中世文化の伝達者」として生きた後半

生としている（3）。

前述の書の中で小坂は禅高の生涯について当該期の文書や古典籍を中心に丹念に論じており、特に前半生の部分については因幡地方の戦国史としても価値が高い。

後半生については文人としての活躍を中心に、残されている連歌や古典籍に記された逸話から禅高の人となりも含めた実像に焦点をあて、最終的に但馬国七美郡に所領を得て寛永三年（一六二六）に死去するまでのことがまとめられている。

後半生については、天正九年以降の禅高の動向がわかる史料があまり多くはないものの、文化人としての側面とわずかに登場する政治史上の逸話の史料を中心に、禅高の生涯において重要な転機を踏まえて語られている。本書はまさに史料に基づく禅高の人物伝となっている。そこで、本論では禅高の後半生、とりわけ天正九年に所領を失った後の禅高について、小坂が概略を論じられている部分を踏まえつつ、もう少し史料から豊臣期の禅高について掘り下げてみたい。

一　天正九年鳥取城攻め直後の禅高

山名禅高の人生にとって大きな転機は、小坂が指摘している通り天正八・九年（一五八〇・八一）の鳥取城攻めであろう。禅高は天正八年の一回目の羽柴秀吉の侵攻の際に毛利方の武将として鳥取城で戦い、籠城戦の末に降伏した。しかし、禅高の降伏により織田方に圧されていた吉川元春が再び因幡への影響力を取り戻すと、毛利方への復帰を望む中村春続、森下道誉をはじめとする因幡の国人たちと対立した豊国は鳥取城を出て秀吉の陣中に向かったとされる。この時これに喜んだ秀吉は禅高の処遇について、禅高を粗略に扱わず、「御居城（鳥取城）」や但馬山名氏の所領であった但馬国出石郡の支配を約束したとされる（4）。なお、禅高は鳥取城を失うこの年に出家したとされている。

しかし天正九年の鳥取城攻めの後には宮部継潤が鳥取城に入った。禅高は因幡に戻ることなく、また出石郡も与えられることもなく約束はすべて

第27回山名会総会について（予告）

新型コロナ感染症の流行によって社会の動きが停滞したこの3年。我々にとって、この3年は次に繋げる「充電期間」であったと思い直して、今後の活動に励みたいと思います。

コロナ後初の山名会総会は、武家政権の原点である鎌倉を訪れて、源氏縁（ゆかり）の史跡を巡り、山名氏との関わりについて理解を深めたいと思います。

昼食場所の「檑亭」玄関

期日：令和5年11月29日（水）～30日（木）平日開催になります。

集合：11／29午前11時　鎌倉・鶴岡八幡宮前

第1日目は、

・鎌倉の奥座敷「檑亭（らいてい）」にて昼食。鎌倉山から臨む相模湾の展望や広い庭園をお楽しみください。

・鎌倉の定番、鎌倉大仏。

・護良親王をまつる鎌倉宮正式参拝。

・北條執権邸地跡に建つ円頓宝戒寺の参拝。

・頼朝公墓所、鶴岡八幡宮自由参拝や周辺散策。

・宿泊は翌日にそなえて、町田市の万葉の湯。

第2日目は、

・織田豊臣の貴重な史料を展示する泰巌歴史美術館。

・JAXA宇宙研究所で少し先の未来のことを勉強。

・相模原市民会館で歴史講演と年次総会を実施。

解散：11／30午後3時頃　JR相模原駅

参加費：3万5千円～、諸般高騰によりご理解ください。

※正式なご案内は、後日差し上げます。参加の検討よろしくお願いします。

会誌『山名』第8号
令和5年8月　発行
編集・発行　全國山名氏一族会
兵庫県美方郡香美町村岡区
村岡２３６５　山名氏史料館内
（事務局　吉川廣隆）

会誌「山名」第８号　令和５年８月　全國山名氏一族会刊行